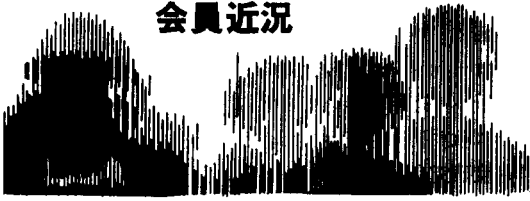


会員近況



青山学院大学
理工学部経営工学科 佃 純誠

最近、統計データを用いて2~3の計算を行なう機会があり、かなり名の通った(権威ある?)統計資料であっても、空間的および時間的整合性が驚くほど不十分なものがあることをあらためて知らされた。空間的整合性がないというのは、たとえばある産業の出荷額と、その産業の内訳分野別の出荷額とが示されている場合、後者の合計と前者とが大きく喰い違(50%以上のズレがあることもある)ということである。時間的整合性がないというのは、同一データの時系列において、ある時点を境にデータに段差があり、しかもその理由についてなんら記述がない、ということである。

このような段差の生ずる理由は、多くの場合、データの集計方法や分類体系のマイナー・チェンジであるが、その変更内容についての記述がないため、修正が困難であることが少なくない。マイナー・チェンジは避けられないにしても、段差を埋めるに必要な情報は必ず付記してもらいたいものである。

空間的整合性を高めるには、結局は調査・集計費用の増加が必要ということになるが、その是非は「その統計データが利用される際にこの不整合がもたらす損失とのトレードオフ」で論じなければならないであろう。

われわれユーザーは、統計データの取扱いに十分慎重でなければならないとともに、これらの不整合の存在やその悪影響を単純に黙認することなく、多くの人たちに知ってもらい、上記のトレードオフの議論を盛んにするよう努力すべきではないだろうか?

木下経営事務所 木下 雄三

17年もの間、ORを中心とする仕事をしてきた東レ(株)を中途退職して以来、早くも2年近くになります。新しい仕事は、不動産投資を主体とする自営業で、年平均2プロジェクトのペースでsteadyにやっており、来年開業予定の2店舗をもってひとまず目標完遂の予定です。このように前職とまったく異なる分野に転出したの

は、主として家庭の事情や自分の価値観に立脚しますが率直に言って大企業におけるORの浸透に1つの限界を感じたからということを否定しません。本誌1977年5月号に「企業における経営科学に未来はあるか」と題し執筆させていただきましたが、「未来」を信じつつも、その未来に自分の貴重な後半生を賭けるわけにはいかないというのが、いつわらぬ本心であります。

とはいえ、現職でも自分の行動が、数式こそ欠くものの、非常にOR的であるのは自分でも驚くばかりで、やはり「アプローチとしてのOR」は確固不拔の方法論として活かされていると痛感しております。別の機会にでも大組織における「ORの人間の側面」とか「脱サラのOR」、「自営業のOR」などといった泥臭い話でも書けたらと思っています。ただし現在の事業に成功したらというIFをつけて。

北海道自動車短期大学
工業経営科 谷口 君雄

昨年、カリキュラムを改正してからは、1年生の前期でOR-Iを担当し、輸送問題をとりあげて、かなり平易に授業しております。さらに2年生の後期では、応用確率・統計の講義を開始の予定です。前者についてはOR的センスの必要性から開設したのですが、すぐに役立つ技法という思わくもあつてか、学生はよく勉強しているようです。

後者については、数理統計学I・IIに引き続いてのもので、コンピュータと結びせながら統計データの実際の解析を狙いにおいた教育をしようと考えております。

日常的には、その他の煩雑な職務をてきぱき手ぎわよく処理のかたわら、情報処理の教室連中と一緒に、クルマの運転に関する統計的分析、とか、北海道における交通事業の経営実態に関する統計的分析、などの仕事を始めたところですが、まだ闇雲の状態です。

何か有益な指導ご助言を賜ることができればと、厚かましくも本誌を通じてお願いしたいと思います。

ちょうど、満10年間、使い古した中型コンピュータの入れ替え問題で、今のところ仕事が山積しておりますがこういふときこそ、全体に調和のとれたOR的発想が必要なのだろうと自らを整理しているこの頃です。

本学に来て主として計算機関係の講義を担当するようになってから1年半ほどになります。そのため現在は研究室の整備がようやく軌道に乗り始めたというところです。研究の範囲は、曖昧な情報と人間の行動現象ということを中心に、理論およびソフトウェアからハードウェアまでかなり手広くやっております。具体的には、意思決定やパターン認識への応用を念頭において、16ビットマイクロプロセッサを多数用いた並列処理システムを設計製作中です。本年度中にインターフェイス等のハードウェア基本部分が出来る予定であり、そろそろソフトウェアのインプリメントを考えておりますが、具体的応用はもう少し先になりそうです。なお先日、会議等でヨーロッパに出張したときに、ポーランドのサイレジアン工大の友人と1週間ほど研究交換をする機会がありましたが、日本が技術の良さによるハード関係の研究環境に恵まれていることを再認識し、具体的応用の成果を早く出さなければと考えている今日この頃です。

現在まで、人間の主観性を包含する意思決定手法としてファジィ集合を導入した決定手法について研究を行なってきました。最近では、ファジィ集合演算が実際に人間の直観的な思考プロセスをどの程度うまく表現できるかを実験的に確かめる問題についても興味をもっています。また、システムダイナミックスのシミュレーションモデルや予測に関する勉強をしているところです。最近省エネルギーの問題が重要となってきましたが、このような問題についてのシミュレーションモデルなどを考えると、全体的な視野からのシステムのモデル化が重要ではないかと考えられます。つまり、現実のシステムをモデル化するためには人間の満足度や各種の予測等を含む総合システムのモデル化が必要であろうということです。このように、複雑なシステムを取扱う必要性に迫られている現在こそ、ORの威力を発揮できる絶好の機会であると思います。

ORの仕事から離れて8年、今年1月から5つ目の職場で、防災の仕事をしています。もっかの課題は東海地震対策です。ORの問題としては、確率を考えて、地震発生時の被害の期待値と対策費用と効果を考えるのですが、地震発生時の年次別確率もわからないので、社内に検討会を設けて、対策をそれなりに検討し、実施しています。

第一線の営業所での企業PRの仕事や送電線・変電所の用地交渉の仕事の経験では、ORのテキストのようにモデル化できないし、データもないが、①従来の考えにとらわれず②いくつかの代替案を用意し評価することによって、私なりの意思決定をしてきたつもりです。毎日の仕事の忙しさに追われて、ORの問題として考えることはできなかったが、用地費、工期、地元事情などを考えた送電線ルート決定は、ORにとって面白い問題だろうと思います。

OR学会員としてはふさわしくないが、ORのファンとして会員の末席をけがしている者の近況と雑感です。

修士時代に、財政に関する地方自治体間のコンフリクトをテーマにゲーム理論を適用したことが、私とORとの実践上での出会いです。現在は、横浜の郊外地域において土地区画整理というひとつの都市開発事業の「実戦部隊」に配属されています。おおよそ役所の業務というものは、定められた制度の枠内でルーティンワークを主とし、企画・研究開発などといったものは、ほんのひとにぎりのセクションで行なわれているにすぎません。

Incrementalismに象徴されるように行政の意思決定メカニズムは、外部環境の変化に対する適応性に関してまったく遅々として鈍感なものです。そして、ORの各手法の利用などは縁遠いものですが、認識レベルを異にして考えますとORマインドをもってして意思決定を支援し得るのではないかと思います。しかし、それも思うようには参りません。なぜなら、意思決定者自身が当面の目的を曖昧にし明確化しようとする意思さえみせません。コスト観念の皆無などという行政体質の現象面を論議するよりも、どうやら、行政の組織管理に重大な欠陥が潜んでいるように思われます。